【平成23年４月　被災者支援部隊　女性警察官（25歳)】

災害派遣活動について

私は、地震発生から３日後の３月14日から18日まで、秋田県警の女性警察官10人からなる「こまち隊」として宮城県に派遣され、各避難所を巡回し、避難所及びその周辺地域における警戒活動、相談等受理業務、防犯指導、広報活動に当たってきました。地震発生後、秋田からは１回目の派遣であり、県内各署から１人ないし２人の女性警察官が派遣されました。そのほとんどが20歳代前半の若い職員であり、派遣中に20歳の誕生日を迎えた職員もいました。

秋田県内では幸いにして人的被害が少なく、私が派遣命令を受けた時には大館市内でもライフラインが回復し、街全体が復旧に向かっていたところでした。地震発生時、大館でも市内全域が停電したため、私は翌日に復旧するまで交通整理に当たっていましたが、13日にはほぼ通常の勤務に復帰していました。しかし、他県では地震による揺れや津波の被害により多くの方が被災され、大変辛い状態にあると聞いており、私もそのような被災者の方のために何かしたいと考えていたところでした。

家族に伝えたところ、余震が続く中、被害の大きい地区に行くということで心配はあったようですが、「被災者の力になれるよう、頑張って来なさい。」と言って送り出してくれました。

現地では、仙台市内の５つの警察署に各署２人ずつ配置され、宮城県警の女性警察官と３人１組で活動しました。私は仙台南警察署という、仙台市の中でも海側の警察署に配置されました。この警察署管内の若林区は、津波による被害が甚大な地域でした。仙台市内には南北に仙台東部道路が通っており、ちょうど大館南バイパス程度の高さになっています。津波はその仙台東部道路でせき止められたのですが、仙台東部道路の海側の地域は壊滅状態になっていました。仙台東部道路の高架下をくぐると、本来であれば住宅や田畑が広がっている海側部分の地域が見渡す限りの泥地になっており、その中にひっくり返った車や船、根本から流された樹木、家財道具や建物の一部と思われるがれきなどがめちゃくちゃに散乱している状態でした。街全体が根こそぎ無くなっているという印象を受けました。その中でも、子供用の机やぬいぐるみなどが流れ着いているのが見えたときは、人々の生活が一瞬にして崩れ去ってしまったのだと感じ、被害の大きさを思い知らされました。

内陸部の街中でも、アスファルト道路に数メートルにわたる陥没や亀裂が所々発生していたり、建物の壁が一面全て崩れて鉄筋がむき出しになり配線が垂れ下がっていたりと、至る所に地震被害が見られました。

市内のほとんどの場所では電気、水道は復旧しておらず、燃料、食料共に不足しており、避難所でも配給のない日がありました。15日以降は雪が降り、非常に厳しい寒さでした。

被災者の多くは学校の体育館や教室に寝泊まりしていましたが、避難所でも暖房が足りず、被災者の方が寝泊まりしている室内でも寒く感じました。

また、道路が所々寸断されているため病院まで行くことができず、小さい子供やお年寄り、持病のある人の薬が足りなくなっていました。私がお話した被災者の方の中は、地震発生の数日前に手術を受けたばかりの人もいて、あと数日分の薬しかないという方もいらっしゃいました。

避難生活の疲れから体調を崩す人が多く、避難所によっては風邪が流行している所もありました。医療ボランティアなどの方々が懸命な治療に取り組んでいましたが、薬も燃料も足りず、発熱した人を隔離する部屋もない状態であり、被災者の方がいかに過酷な生活を強いられているかが分かりました。そのような中で、話しかけたとたんに泣き出す人もいるなど、多くの人が精神的に疲弊してきていると感じました。

避難所以外でも食料、燃料共に不足しており、ガソリンスタンドや食料品店には長い行列ができ、雪が降る寒い中、何時間も並んでいる市民の姿が街中で見られました。

それに伴って治安が悪化しており、ガソリンスタンドでは、なかなか給油ができないことにいらだった客と店員とのトラブルなどが頻繁に発生していました。コンビニエンスストアでもドアがこじ開けられ商品が盗まれたりしているところもありました。

行方不明者の捜索や遺体の検視などに多くの職員が出払っている中で、110番通報が途切れることなく続いておりました。宮城県警では地震被害にあったり、殉職した職員がおり、地震発生から不眠不休の過酷な状況であったのですが、その中でひたむきに活動にあたっている姿が印象的でした。

現地では宮城県警察学校に滞在しました。電気、ガス、水道は回復していなかったのですが、全国各地や海外からも部隊が到着しており、水や食料を分け合って助け合いながら活動していました。

私たちの現地での活動内容としては、各避難所を巡回し、相談・苦情の受理にあたるというものでしたが、一番多かったのが「家族とはぐれてしまった。連絡も取れず不安だ。」との相談内容でした。中には子供が幼稚園に行っている間に地震が発生し、幼稚園が建物ごと流されて現在まで発見に至っていないというものや、家族全員と連絡が取れないなど、話を聞くだけで辛いものもありました。安否不明者の届出はたいへん多く、指定の避難所以外にも学校や会社などの大きい建物に避難者の方が集まっている場所があり、また各避難所を転々としている人もいたことから、多くの避難者の方の状況を確認することは厳しい状態でした。そのような中で、避難所を一つ一つ回り、設置されている掲示板から人の動きを調べたり、被災者の方や避難所の責任者の方と面接し、安否不明とされていた数人の方を発見することができました。活動中、連絡の取れなかった家族と無事再会できた方の話を聞いたときが一番の喜びでした。ある高齢の男性が「おかげさまで安否不明であった息子夫婦と孫が見つかった。」という話を聞いたときは、よかったと心からうれしく感じました。

また、目の前で家族が津波に飲み込まれていった、家や財産をすべて失った、などという想像を絶する辛い経験をされた方や、夜になると余震が怖く落ち着くことができない、自分は高齢のため壊れた家を片付けることもできず一人で取り残されている、これからどうやって暮らしていったらいいかなど、これからの生活に不安を感じる方も多く、一人一人の話を親身になって聞き、少しでも不安感を軽くできるようにと心がけつつ活動に当たりました。

大変な思いをされた被災者の方に対し、どのように声をかけたらいいか、本当に被災者の望む活動ができているのかと迷う部分もありましたが、「秋田からわざわざ来てくれただけでもありがたい。」「被災してから生きるのに精一杯で誰とも話をできなかった。聞いてくれてよかった。」などという言葉をかけていただき、逆に元気づけられる思いがしました。

また、被災地をパトカーで走っていると、歩道からパトカーに向けて「ありがとう」と書かれた紙を掲げて立っている住民の方がいたり、民家の塀に大きな字で「がんばろう」と書いてあったりと、自分が苦しい中でも感謝の心や前向きさを忘れない住民の方に人の優しさや力強さを感じ、とても励まされました。

被災地の状況はテレビなどで目にする以上に厳しいものでありました。しかしそのような状況下でも明るく懸命に頑張っている現地の方や、全国から支援のために訪れる多くの方の活動を目にし、復旧のためにたくさんの人の力が結集しているのだと感じました。

今回の活動を通じ、小さなことであっても一人一人が自分にできることをしていくことで被災された方の力になることができるのだということを実感しました。

派遣を終え帰県しましたが、これからも自分に何ができるかを考え、警察官として住民の方に喜ばれるような活動を実行していきたいと思います。